

鶴胡飲水數斗而不足東山經郭注云今鶴鷗足頗有似人脚形狀也毛詩正義引陸璣云鶴水鳥形如鶴而極大喙長尺餘直而廣口中正赤領下胡大如數升囊若小澤中有魚便群共抒水滿其胡而棄之令水竭盡魚在陸地乃共食之故曰淘河也嘉祐本草云鶴鷗大如蒼鵠頸下有袋胸前有兩塊肉列如拳郝曰今此鳥黑色高脚垂胡食多肉少是俗呼伽藍鳥者是鶴鷗鶴鷗二鳥不同爾雅亦兼載鶴鷗亦可證其不同而鶴鷗亦能捕魚莊子外物篇云魚不畏網而畏鶴鷗故皇國古書多以之爲字古事記云櫛八玉神化鶴又以鶴羽爲葦草又如鶴浮於河萬葉集云鶴養日本後紀云盜官鶴讚岐郡名有鶴足其他尙多今俗亦用之與日本紀以鶴鷗爲字其說不同也辨色立成謂鶴鷗鶴皆訓字然其物不同遂云大曰鶴鷗小曰鶴鷗者互誤又按字介譬餓等蔑見神武天皇御歌則是鳥名字自古而然源君以志麻都止利爲鶴鷗古名以宇爲其小者俗名亦誤也

(倭名類聚抄羽族體)蜀水華本草云蜀水華乃久曾鶴鷗矢名也

(類聚名義抄九鳥)鶴力吾反、ウ、鶴鷗、鶴鱸俗鶴鷗盧茲ニ音、ウ、大曰鶴鷗、シマツドリ、水鶴ウ  
慈音、ウ、シマツドリ、サクナキ、鶴鷗ウ、鶴鷗俗、鶴鷗或正徒號反、ウ、ツフリ、メエ、鶴鷗音烏宅、ウ

(東雅十七鳥)鶴鷗ウ○中  
倭名抄には辨色立成を引て大曰鶴鷗日本紀私記に云ふシマツドリ、小曰鶴鷗俗にいふウと註したり此註せし所の如きは其大なるをシマツドリと云ひ小なるを俗にウといふなりされど上世より云ひつぎし所はウとこそいふなれシマツドリといふ事は神武天皇の御歌にウといふ事のたまひ出むための御詞なりしを後には其名となりしと見えたりシマツドリとは其島に棲みぬるを云ふよし萬葉集抄にも見えたれどウといふ義は詳ならずウとは浮の義なるに似たり神武天皇の御歌にシマツドリと讀み給ひしは下句にウとのたずまひ出すべきための枕詞也されば日本紀私記にも欲讀鶴の發語也とは云ひけりたとへば火出見の御歌に鶴といふよしひは聞えねど鶴をばシマツドリといふ事になりて又其大なるの一名をオキツトリといふよしひは聞えねど鶴をばシマツドリといふ事になりて又其大なるをシマツドリといひ小なるをウなどいふ事も出來しと見えたり立成に小曰鶴鷗の説も心えられず毛詩曹風に見えし鶴は陸璣疏には鶴水鳥形如鶴而極大喙長尺餘直而廣領下胡大如數